

# 民俗博物館だより

Vol. XII No. 3

1985. 12. 25



▲ 箸づくり用具 (下市町・野迫川村)

## 目次

鼠米 (香米) のこと.....	1
六斎念仏用具について (その二) (物質文化⑮) .....	4
屋根について (その二) (大和の民家⑮) .....	6
大和高田市曾大根の仕事着 (民俗資料調査抄報⑳) .....	7
おしらせ、他.....	7

## 鼠米（香米）のこと

岸田定雄

十津川に今も鼠米（ねずみごめ）と言われる米がある。この名は広辞苑にも載っていて「鼠の臭気ある米」と説明せられている。十津川では、炊いたこの米の匂は鼠の尿に似ているからという（最近この村の青年諸君がこの米と普通米、番茶を竹の容器に入れ茶粥セットにして観光物産として売り始めた）。

食べる米にこんな厭な名を付けるのは不思議に思えるが、とにかくこの名で呼んでいる。この米五勺に普通の米二合を入れて炊いた粥は香ばしくおいしいと言う（故野長瀬正夫氏）。このため鼠米を作っているのである。

かなり前になるが私は十津川村上湯川の最奥の小字寺垣内でこの米を作っている田圃を見たとし、その田の主に頼んで粥を炊いてもらって食べたことがある。少量領けてもらい家に帰って粥に炊くと家の者はやはりよい匂がするというし、米自体も匂っているとの話であった。

十津川全村にこの鼠米が作られているかどうかは知らないが、神納川の三浦や那知合で作られていたことは聞いた。今もあるかどうかは承知しない。外の大字はどうであろうか。

十津川以外の吉野の山村に鼠米があるかどうかは調べていないが、和歌山県有田郡清水町でヤロクと呼ばれている米が鼠米であることを同地の堀江茂一氏から聞いた。外部から南熊野へ甘藷は三度入っており、その中の一回は田辺の在の旧家安宅川弥六が安永、天明の頃にもたらしたものである（雑賀貞次郎著『南紀熊野の説話』）。清水町で言うヤロクは、この米も土佐か阿波あたりから弥六が入れたので、その名が付いているのかと思っていたが、土佐にヤロク稲のあるのを知り、清水町のヤロクは安宅川弥六との関係ではなく、やはり往来の深い土佐からヤロク稲を輸入したものと思う（土佐にある稲の品種名として毛稲、法師稲、ヤロク稲、桜早稲、太稲などの名が岡田助太蔵著『地方大要』に見えている。『日本赤米考』参照）。

しかし、ここでのヤロク稲は鼠米かどうか

は判明しないが、近藤日出男氏の教示によると鼠米の一種である幡多弥六の栽培地は高知県幡多郡佐賀町荷稲であるというし、土佐には現在も窪川あたりには相当量作っており、また他にヤロクの名の付くのも少なくない。

鼠米を和歌山県西牟婁郡大塔村ではカオリ米といいやはり粥に炊くとうまいという。辺地だから残ったのだろうかとも言う。

和歌山県内には他にも鼠米があろうし、あったであろうが、十津川の鼠米も四国あたりから熊野へもたらされたものが、この十津川へ入って来たものかと考える。『紀伊続風土記物産、穀部』に舩（タイトウゴメ）が挙げられ、牟婁郡各処にキアカという赤米のあることを述べているが鼠米の記述はない。

古い俳諧書『毛吹草』に諸国の物産を記しているが、芳米（カバシコ）と書かれているのがこの米で、産地は豊前と筑後とである。

『和爾雅』には芳米にカバシコメと仮名付けているからカバシコはカバシコメの下略したものかと思う。

篠田統著『米と日本人』の中にこの鼠米の記述がある。白楽天は長江のほとりの香稲（鼠米）の味をその詩の中でたたえ、貴州各地の香稲の味を賞味した後人の紀行のあることも挙げている。しかし、同博士の祖父君が伊豫松山藩の使者として鹿児島に赴く途中、上陸した豊後の鶴崎から阿蘇の内之牧までの間食べた米は「例の鼠米にて」と食べ難いこ



▲十津川村果無の畑地

とを書き、帰りには野津原で「今日より鼠米相止」といかに鼠米に困ったかをその日記に書き留めている由である。そして、「明治になっても、大分県には香稲が多かった由」と付加している。『日本赤米考』にも、古い大分県勧業報告を引用して全国米麦共進会では本県産米は赤米が多く、また鼠臭があることを問題にされたと言っている。大分県ではこの鼠臭米駆逐に努力したのであるが、やはり嗜好があるので残っていたと思う。この県の人々もやはり粥に炊いた折の香味を好んだのであろうか。

古くから丸粒の赤米のあったことは正倉院文書や平城京地から出た木簡で明かであるが、上記籼の赤米は細長い印度系で後来、もたらされたものである。十津川の鼠米はともに植えている多量の日本種と交配してか、細長か丸粒か、むしろ丸粒のように見えるが、上記『米と日本人』には鼠米はオリザ サティヴァ インディカでインド稲系とあると記述している。筆者など非専門でこの方については見解を述べることはむつかしいが、上記『毛吹草』の九州の物産に芳米があり、大唐米があり、

日本種より遙かに後れて日本に入ったこれらの種類をわざわざ挙げて記しているように思える。

籼も遠く東北地方にも栽培せられているが鼠米も同様北地へ延びているであろうか。これについて多くを知ることはないが、宇都宮大学に勤めておられた、茂野悠一氏は東北地方では田圃の周囲部にこの米を育てると言う。そしてこの種は低温に強い由である。

『日本赤米考』によると広島県山間地方一山県部一では昭和初期に当時まだ残存して問題となっていた香稲を駆逐するために奨励された早稲のなかに「こぼれ」種があったということで、ここにも好まれなかった鼠米の残っていたことが分る。

わが大和には鼠米が十津川にしか残っていないものであるから、前記の如く日本全土での鼠米分布に関心して記述したが、このことは専門家なれば簡単に明らかになることであろう。

昭和五十八年六月、島根半島東端にある美保神社に参拝した際、神社の壁面に「祖先が珍重した香稲(米)」「古い稲を語り伝えましょ



▲十津川村では家の前にハゼがありその周囲が畑地である。

う」の二つの標題で香稲のことが掲げられており最初の方にはカバシコの名で古来各地で神饌米、祭事用、来客用としてわずかずつながりながら広く栽培珍重されていたが、現在では過去の品種として消滅にひんている等々、後の方には中国山脈西部で近年まで作られていたカバシコは香りの強い稲で穂が出るともう香でわかるほどであったが、そのほとんどが出雲の美保神社から持ち帰られたものだと云われている云々とし、古い品種を大切に保存し、作り伝えていこうと結んでおり、数種のこの稲の穂が出陳せられ更級農業高校の唐木田教諭の書かれた文字も貼り出されてあった。

この展示文の中で中国山脈西部で作られていた香茶の種子は美保神社から持ち帰られたものであるということに注目せられた。対馬や種子島や備中にある神社に赤米を重要な神饌米として今も猶物忌みして厳重に育てていることは知られているが、美保神社では同様にしてこの香米も作られているのであろうか。また日本全土に香米を神事に供進したということが残っているであろうか。またあったであろうか。是非知ってみたいことである。

わが国の国別著名産米表の中に香米を九州筑後カハシコ、豊前カハシコとして挙げているのは(『日本赤米考』115頁)、『毛吹草』からの引用かと考えるが、この書物の口絵カラー、日本産米中に「印度型赤米・メラゴメ(香米)」がある。メラというのは日向の米良のことであろうかと思うが、ここもやはり深い山地であるからこの米が残ったのであり、更に興味深いのは赤米の香米ということである。

古い話であるが昭和二十七年七月阿波の祖谷へ入って民俗採集を行った折、赤米の香米のある事を聞き、その頃柳田先生から直接赤米のお話を聞いて、この米への関心をいただいていたもので、この旨先生に御連絡しておいた。柳田国男集の月報に浜田秀男博士が柳田先生からの書信何通かを紹介せられたが、その中の一通に「阿波の祖谷山にも赤米の香米古くからあるよし奈良の岸田君より知らせくれ候」とある。(昭和27年8月13日付)ところが同年11月の稲作史研究会で先生は「前の会合で祖谷山の赤米は香米だと申し上げたが間違いらしい。香米と赤米との結び合わせはど

うもならないらしい」と言っておられる。前記メラゴメは赤米の香米であるし、近藤日出男氏によると土佐にもこの種はあるとのこと。

香米は下等米として駆逐するよう指導せられてきたが、東南アジアの諸国やインドネシアでは却って賞美せられると聞く。ここにも我々との嗅覚と味覚の差のあることを知らされるが、十津川にこの米の残ることから、十津川以外の奥吉野の山村にもこの米が入っていたか、紀伊では、どの範囲に広がっていたか、十津川へ香米を送り込んだ紀伊の香米は他地方のどのあたりからどのようにして誰が何時頃運んだものであろうか、香米は日本のどの範囲に広がっている(或はいた)か、西南日本に赤米を神饌米として尊重しているが如く香米にも同様の例があったであろうかなど停滞して一向進まない事ながら、なおも興味を持ち続けているのである。

(昭和60年9月17日記)

(追記)

稿を終えてから大言海の「ねずみごめ」の項を読むと『和訓栞』後編を引用して「海面に多し」とあるから『和訓栞』の著者伊勢の谷川土清に鼠米は日本の西南地方の産と承知していたことになる。

また『第二稲の日本史』(昭和32年3月刊)諸家座談会の席に少なからずこの米についても語られている。

香米は土佐ではまだ盛んに作っており、神様に上げるのに香米を選ぶ。(柳田)

大分県ではねず米が多く、昔、輸出する時には値が安かった。また茨城県にも相当あった。

(安藤)

中国では香稲といい、インドではセンチッド・ライスといい普通米より値が高く尊重している。

(安藤)

部落の風上で香稲をたくと、部落全体にいいにおいがした。(浜田)

茨城県で一升到三合ぐらいの割でまぜてたくとおいしいという。(安藤)

日本で気がついたのは(香米は)みな日本型の米。(盛永)

インディカにもある。(松尾)

中国にも印度にもインド型の香米があり、これには赤粒・白粒の外まだら色もある。(盛永)

大和本草の中にはかばしね。(古島)

(同書34頁から43頁あたり)

尚篠田統著『米と日本人』の鼠米を述べた項に同氏研究室の飯田喜代子講師が幼時この米を食べたとあるのは母堂が山形県産のものを知人から頒けられたものとの教示に接した。

(近畿民俗学会理事)

## 六齋念仏用具について (その二)

奥野義雄

館蔵品の六齋念仏太鼓について、すでに本誌第10巻3号で紹介したが、ここではこの六齋念仏太鼓とともに用いられていた念仏鉦と大和にのこる六齋念仏講が所持する念仏鉦について紹介していくことにしよう。

\* \*

まず、館蔵品である六齋念仏鉦についてみていくことにする。この念仏鉦は、すでに紹介した念仏太鼓とともに、奈良市佐紀町の六齋念仏講(ネンブツコウ)が所持していたものであり、館蔵品となった経緯はさきの本誌第10巻3号の「六齋念仏用具について—館蔵品と西迎寺管理の六齋念仏太鼓を中心に—」で述べたので省略するが、同念仏講所有の六齋念仏鉦六丁の内、二丁が館蔵品である。この念仏鉦の法量、特色そして金石文(刻文)などを次に記載する。

■六齋念仏鉦および撞木・採集地 奈良市佐紀町

(1)資料番号K1279(念仏鉦)

①法量:  $\phi$ 19.2cm(内 $\phi$ 17.0cm)、  
H4.8cm、重さ1,600g

②様式: 几型金属製

③色調: 暗褐色、光沢あり

④刻文: 鉦裏面周縁にあり

文政十<sup>(平脱カ)</sup>二月吉日 奉納施主山治郎

(2)資料番号K1280(撞木)

①法量: W17.0cm、D22.9cm、H0.4cm、  
重さ200g

②様式: T字型竹製

③色調: 暗茶褐色

(3)資料番号K1281(念仏鉦)

①法量:  $\phi$ 21.5cm(内 $\phi$ 18.6cm)、  
H5.1cm、重さ2,160g

②様式: 几型金属製

③色調: 暗褐色、光沢あり

④刻文: 鉦裏面周縁にあり

爲玄蕭童子<sup>(并)</sup> 天明二<sup>(并)</sup> 天七月 常福  
寺村彌右衛門<sup>(衛)</sup> 寄進之者也

(4)資料番号K1282(撞木)

①法量: W20.0cm、D22.6cm、H0.6cm、

重さ200g

②様式: T字型木製

③色調: 淡茶色

以上、念仏鉦二丁について紹介してきたが、佐紀町の光明寺に保管されている残りの四丁の内、鉦裏面周縁刻文の一つを挙げると次のとおりである。すなわち、

爲釋智西菩提 淨福寺村六<sup>(寄)</sup> 寄  
附 施主神殿村<sup>(并)</sup> 乃<sup>(并)</sup>

とあり、神殿村の「乃ぶ」という女性が念仏鉦を寄附(寄進)したことがわかる。そして、寄附の意図は、乃ぶの近親者と思われる「釋智西」の菩提、つまり供養のためであったことが理解し得る。この寄附行為の時期は明確ではないが、江戸時代のことではないかと想定し得る。

このほかに収蔵し得なかった念仏鉦の刻文には、

和<sup>(寄)</sup> 添下郡常福寺西蓮寺常住施主十三日講  
寛延二<sup>(寄)</sup> 年十月吉日(念仏鉦裏面右周縁の  
刻文)

京大佛住 西村左近宗春<sup>(寄)</sup> 作(念仏鉦裏面左  
周縁の刻文)

とあり、この鉦も寄進されたものであろう。また、別の念仏鉦にも「天明五<sup>(寄)</sup> 七月」の年銘をもつものもある(傍点—奥野)。

このように館蔵品および館蔵品以外の念仏鉦には、年代、寄進主体、寄進目的などが刻まれているが、これ以外に念仏鉦の作者名も刻まれていることがある。

\* \*

そこで、この念仏鉦の作者、つまり「宗春」になる人物について若干窺ってみることにしよう。

この宗春は、「京大佛住」の人物で、大和の各地に現存する鉦を製造していたことが窺えるが、その一例を次に挙げてみよう。すなわち、都祁村吐山の雨乞踊に用いる鉦の刻文に、「京大佛住 西村上総大掾宗春」とみえる。この都祁村の鉦は、念仏鉦ではないが、さきの念仏鉦に刻まれていた「西村左近宗春」と

同一人物であると思われる。

一方、奈良市日笠の鉦の刻文には、「宗春」ではなく「宗味」なる人物も鉦を製造していたことが窺える。すなわち、「室町住出羽大掾宗味作」という刻文がそれであり、「宗春」と同様に鉦を製造していた職人であったことを知る。

また、この「宗春」と「宗味」との関連の有無についても興味深い点であるが、管見の金石文や史料からは両者を関係づけるものを提示し得ない。

ただ、「宗春」も「宗味」も京（山城）の鉦づくりの職人であったこと、大和の念仏鉦をはじめ祭礼や宗教行事でつかわれてきた鉦が彼ら京の職人によって製造されたことは明白であり、彼らが活躍した時代は江戸時代であったことも確かであろう。

このように念仏講のもつ宗教的意義とともに講中が所持する念仏鉦をめぐる、鉦づくりの職人の存在を浮き彫りにしていくことも必要であろう。そこにこそ物と信仰・祭礼を結びつける必然性があるといえよう。

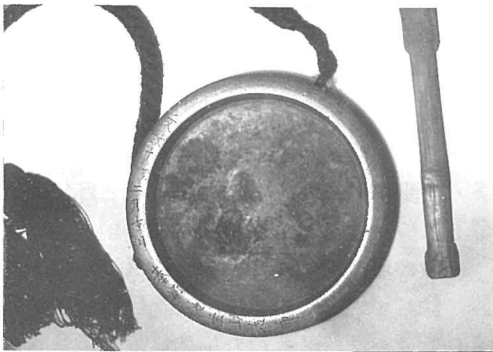
[1985. 11. 25]



▲六斎念仏の読唱状況（御所市東佐味）



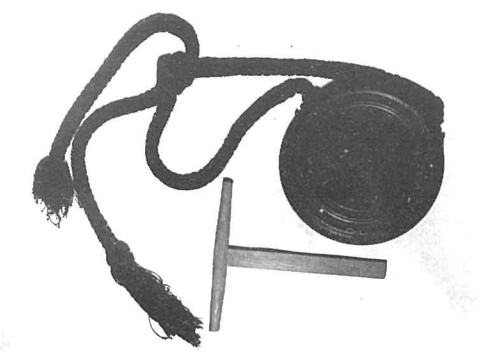
▲天野の六斎念仏鉦（和歌山県・かつらぎ町）



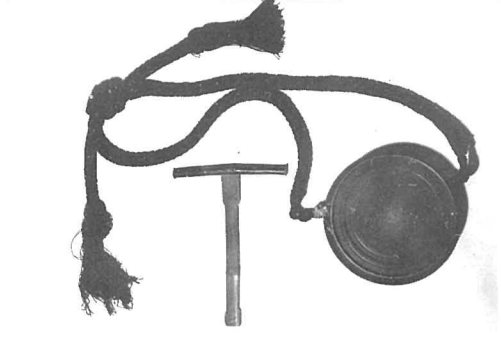
▲K 1279の資料（念仏鉦）



▲K 1281の資料（念仏鉦）



▲同 上



▲同 上



## 屋根について (その二)

長谷川 晋 平

本稿は「大和の民家—屋根について (その一)」に引き続くものである。先稿では民家の屋根の概要と、草葺き屋根を現在も支えている元自明組の吉岡忠雄氏 (宇陀郡榛原町諸木野在住)、隅田隆蔵氏 (同郡大宇陀町大熊在住) から聞き取った事項を取り纏め、一地方の草葺職人の集団である自明組は、比較的民主化した組織運営を行っていたこと、また、徒弟制度の一面や、施主のありかた、出仕事の日々、施工手法なども断片的に述べた。さらに、現在ではほとんどが行われなくなった屋根葺

## 用語説明

- ① スズメオドリ  
一般に孟宗竹を用いる。
- ② イタガラス  
宇陀郡の東南地域では杉皮を2・3枚重ねたものが多い。
- ③ ジムネ竹
- ④ サラシ竹
- ⑤ トコ竹
- ⑥ ジムネ竹・サラシ竹・トコ竹をカガル
- ⑦ クイ
- ⑧ マキ皮
- ⑨ 皮オサエ
- ⑩ テツキ  
妻や軒の木口部をいう。
- ⑪ トモエ
- ⑫ ハフイタ
- ⑬ シュココロ
- ⑭ オリ竹
- ⑮ 竹グイ  
ジムネ竹の両側に打ち込む。
- ⑯ ダンガヤ
- ⑰ 木グイ
- ⑱ コムナ木  
生木を用いる。
- ⑲ シボリ竹
- ⑳ ハフカゴ
- ㉑ タツ竹
- ㉒ カゴ竹

この竹が屋根全面に取付いた状態をヤネカゴと称する。

- ㉓ タツピン  
丸太の垂木のこと。

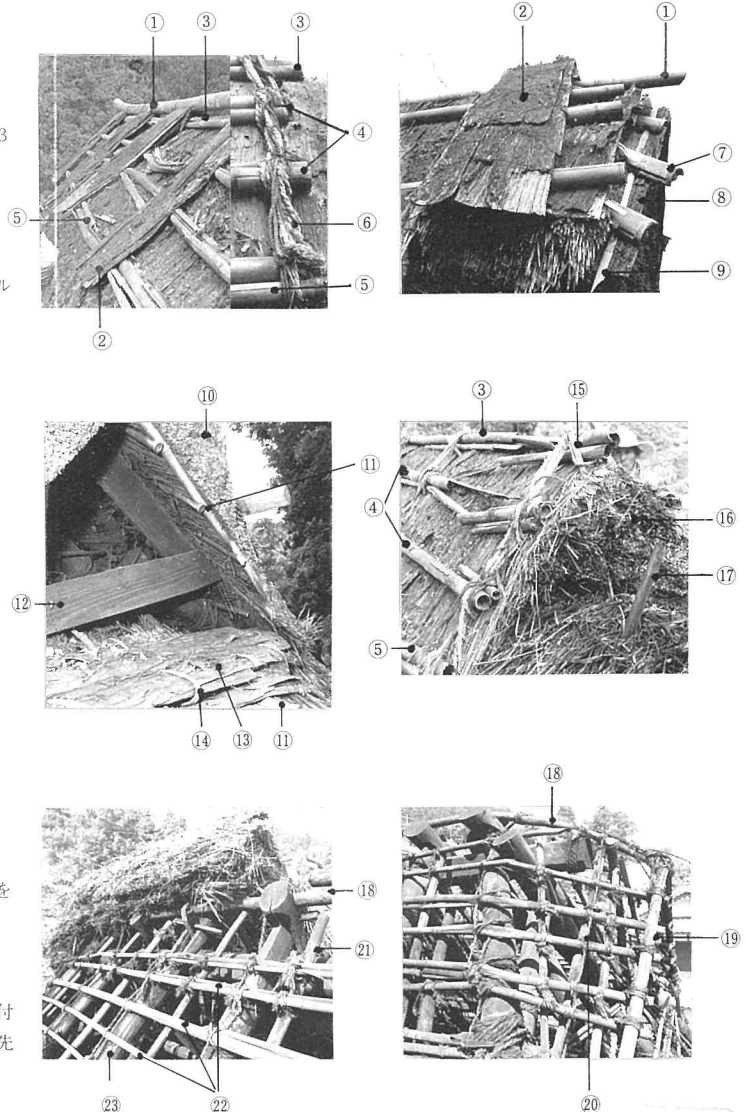
以上の他、棟束をウダチ、合掌に取付ける母屋をヨコビシ、また、上屋の梁先に乗る丸太はクサゲタと称している。

儀礼についてもふれておいた。

さて、本号は屋根について (その二) として、一地方の草葺き職人が日常用いていた、草屋根を構成する各部材の用語を、先の両氏から聞き取り、下記に報告するものである。

なお、紙数の都合もあって一部割愛しているが、これらの用語が奈良県下の標準的なものなのかどうか、今後、他の地域での調査を行い、拡充していく予定で、後稿にゆずることとする。

注「民俗博物館だより」通巻第42号を参照



# 大和高田市曾大根の仕事着

徳田陽子

大和高田市曾大根は、奈良盆地の南西部に位置する農村である。

明治頃までは綿作もしていた。この綿から作った木綿糸を使って機織りをした。反物の耳の部分に当たる縦糸を2本ないし3本一緒に織ったり、白木綿の場合晒していないきなりのままの糸を使ったりしたので、少しゴワゴワしていたが丈夫であったという。

ここでは、曾大根における稲作を中心とした農作業用の仕事着について、男女別にみていくことにする。

男の服装は、白と紺の縦縞木綿か、白木綿のジユバンを着て、バッチをはいて、黒か紺の無地木綿のボッコを着て、黒木綿の帯をしめた。頭には手拭でハチマキをし、腕には紺無地木綿の腕拔、足にはワラゾウリをはいた。

ボッコは、鉄砲袖（巻袖のこと）で、身丈は2尺7寸から3尺ぐらいの長さである。身丈は、次第に短くなっていったという。単・袷・綿入れがあり、冬には単のボッコの上に綿入れのボッコ、あるいはジンベサン（袖なしの綿入れ）を着た。

バッチは、半巾の胴回りを付けた型で、丈は足首まであり、田に入るときなどは裾を紐か藁でくくって素足になった。紺、又は白と紺の細い縦縞木綿で作った。

女の服装は、肌ジユバンを着て、オコシを巻いて、紺か縞の筒袖のヒッパリを着て、三尺帯でキッチャ結びにして、前掛をした。頭には手拭で姉さんかぶり、手にはテオイ、足に脚絆を巻いてワラゾウリをはいた。

冬には、オコシの上に、白木綿の袷、又は白かピンクのネルで作ったドマキを重ねた。

ヒッパリには、単・袷・綿入れがあり、冬は綿入れのヒッパリを着たり、袷のヒッパリの上にジンベサンを着たりした。

三尺帯は、きれくずを横糸として使って織った。

女はバッチをはかなかつた。

以上のように、曾大根の仕事着は、男女共に上衣・下衣に分かれていた。上衣の裾は下衣の上に出すので、ボッコ・ヒッパリ共に3寸程のうまのりをつけて動きやすいようにした。奈良盆地の一般的な仕事着の例である。

## ★★★★ おしらせ ★★★★★

### ●民俗博物館の行事予定

☆S60年12月10日(火)～S61年3月21日(金)

テーマ展「家具・調度と生活」

☆S60年12月10日(火)～S61年3月21日(金)

民俗文化財速報展「下駄と下駄職人」

☆S60年12月14日(土)午後1時より

体験学習講座「シメナワつくり」

☆S61年1月25日(土)午後1時から

体験学習講座「ワラゾウリつくり」

### ＜追悼 堀井甚一郎先生＞

大和民俗公園建設審議会委員として、当館設立準備の時期よりご指導を賜っていました堀井甚一郎先生は、去る11月8日に逝去されました。

多くの人々に敬慕され、また当館の運営においても一層のご指導とご助言をいただかなければならない現在、先生の訃報をここに告げることは痛惜の念に堪えません。慎しんでご冥福をお祈りします。

### 《表紙説明》

奈良県南部の吉野郡では、むかしから箸づくりが盛んに行なわれてきたが、これはこの箸づくりの用具。今日では、機械化されているが、かつてはこれらの用具をつかって一本一本箸がつくられた。（この箸づくりの用具は県指定有形民俗文化財になっている。館蔵品）。

### ■編集後記■

雨を必要とした夏場に雨は降らなかったが、暑い残暑が過ぎると、雨の日が多くなってきた——10月から11月へと時が流れていく中で、〈雨の日〉が次第に寒さをまねき込む。そして、12月を迎えると、冬到来となる。

一段と寒さが増すにしたがって、公園の樹々ももう冬仕度を終えて、〈静の世界〉へと移っていく。そして、展示場の群像も静かな情感を漂わしながら、物を凝視する人の眼が、物へ語りかけるようにみえる。物と人との会話が寒気の中でかわされる——昨日、今日、そして明日も。 (✕)